



## 登山の文明史観と文化史観

【日本山岳文化学会 会報：NO.33 掲載】

田中文夫（神奈川県）

「山岳文化環境」を論ずる中で文化と文明を分けて捉えると、私の知覚は現象と理解のより一致をみることができるようになった。巷“歴史は繰り返す”というが、別な表現をすれば、“文明は必ず滅びるが、文化は時を超えて再生する”となろう。文明は進化一筋に進行し、やがては滅亡してオールクリアとなる。物理的にはエントロピーの法則でも示される。一方文化の形象は進化による滅亡があっても、その文化が内包した性質は継承され、世代を超えて再び現れる。このように登山史の捉え方を二つの方向、つまり文明史観と文化史観に分けて捉え、それを構造的に再構成することにより登山の総合により迫ることとなる。

現代登山の文明史観は“より高く、より困難”を求めて初登頂、初登攀を競った結果、滅亡に至った。（山は死んだ！）文明史観の結末は、技術によって自然を人工化し尽くし、文明の死をもってジ・エンドとなる。わずかに登山記録の隙間を埋める行為は残されているが、人類史から見れば枝葉の末葉な位置にある。過去の記録を整理・編集し後世に伝える必然は、山岳人がやらなければならない。

他方、登山の文化史観は多様化の中で相互の関連と尊厳を失い、互いに無関心となっている。多様すぎ、その切り口と土俵がバラバラなため、相互交流や統合は極めて困難となる。今また中高年の登山ブームを招いているが、文明史観な進化を求める様相ではなく、労少なく余暇を楽しむ文化の一面として理解できる。しかしかつてのアルピニズムと土俵が異なり、別次元に位置付けねばなるまい。

はたして登山文化の成熟が登山文明に延命をほどこし、また次世代へと引き継いで再生を期待できるだろうか。“山ガール”なる種族が子の役割、孫の役割を引き継ぎ、山岳文明の再生を担ってもらえるのだろうか？私の見解は否である。むしろ文化史観の充実を図ることこそ、現代的要請であろう。

今春医系大学を卒業して就職した我が家の次男坊は 11 月、初めて一人で北岳を登ってきた。幼児から槍や穂高を連れ歩き、中学生になった春はヒマラヤトレッキングにも行ったが、自ら試みる山行は初めてであった。モラトリアムな学生時代が一変し、救命救急病院の職場は生死を分ける戦場でもある。自ら死生観を確立する経験を積む間もなくの就業で、次男坊は苦しんでいる。そのような中で一人テントをもっての山岳体験は、かつての文明史観的アルピニズムと異なる生命への問いかけとなる。山岳文化がもたらす多様な経験と内面性の一断章である。

人類の宿命は在るがままの自然を食いつくし、人工化させる過程の中にあるが、まだそれなりの自然は残されている。生命の人工化が進められている文明進化の中で、あるがままの自然に肉体と生命をさらけ出す（山岳）体験を通して築く無形の文化価値は、人類継承の意味づけや人と人との関わる中での愛や信頼という安らぎの心を持続させることに役立つ。文明史観は記録を残すが、文化史観は心に宿り明日の創成と再生を媒介してくれよう。